

平成 28 年度 自己点検・評価書

佐賀大学

アドミッションセンター

I. アドミッションセンターの目的と概要 3

II. 領域別評価（組織運営の領域）

観点① 4

観点② 8

III 平成28年度アドミッションセンター報告書（添付資料）

I アドミッションセンターの目的と概要

佐賀大学アドミッションセンター（以下、「センター」と略記）は、平成19年9月19日付のセンター要項に基づき同年10月1日に設置された。センター長（併任：1名）、専任教員（1名）及び特任講師（1名：平成28年度より着任）で構成される。センターの目的と業務内容は以下のとおりである。

（新）

【目的】

センターは、入学者選抜、入試広報、高大接続等に関する企画、立案等の業務を行うとともに、学部及び研究科で実施する入学者選抜を専門的立場から支援し、国立大学法人佐賀大学（以下「本学」という。）の教育研究の充実発展に寄与することを目的とする。

【業務】

1. 入学者選抜の制度、方法等の設計に関すること
2. 入試広報の企画、立案等に関すること
3. 高大接続、高大連携活動等の企画、立案等に関すること
4. 入学者選抜等に係る調査研究に関すること
5. その他入学者選抜に関すること

（国立大学法人佐賀大学アドミッションセンター規則より抜粋）

センターで実施した調査・研究および活動記録は、年度末に「アドミッションセンター報告書」にまとめられる。本自己点検・評価書では、「平成28年度アドミッションセンター報告書」（添付資料）を根拠資料とし、点検および評価を行う。以下、同報告書は、「報告書」と略記する。

II 領域別評価（組織運営の領域）

【観点①】 アドミッションセンターの業務が十分に遂行されているか。

観点①-1 入学者選抜の制度，方法等の設計に関する支援が十分に遂行されているか。

（観点到に係る状況）

■ 佐賀大学版 C B T の開発

前年度に実施した「化学」の試行版テストのモニター調査結果を踏まえて改訂版を作成した。また、国立教育政策研究所の研究チームとデジタルテストに関する研究会を行った。一方、「英語」の4技能を測定する C B T 活用の検討を始め、英語教員によって、「英語」の試行版テストを作成し、佐賀大学生 30 名を対象としたモニター調査を実施した。化学、英語以外に、基礎学力及び学習力を評価するための「基礎力&学習力テスト」の開発に着手するとともに、CBT システム環境構築に向けて仕様策定及び業者選定を行った。

■ 特色加点制度の関する検討

特色加点管理システム開発に向け、調査書と特色加点申請書の内容の比較分析、調査書に記載された高校生の活動・実績分析（平成 28 年度志願者 3000 人分）、高校生と関係が深い資格・検定等の調査、調査書の高校別評定平均分析（約 500 校）、全国高校偏差値調査などを実施した。また、「特色加点管理システム」の仕様書作成に向けて開発業者の選定を行った。

■ 大学入学者選抜委託事業（文部科学省公募）への応募

高大接続改革を先導的に進めるために、佐賀大学が中心となって、九州・沖縄地区の国立大学（10 大学）と日本 IBM が共同して取り組む事業を企画し、「調査書を中心とした書類審査の評価方法および活用手法に関する研究」として応募した（結果は不採用）。

■ 「九州地区国立大学アドミッション研究会」の提案

九州地区の国立大学のアドミッション部門の関係者が集い、意見交換をする場として、「九州地区国立大学アドミッション研究会」を提案した。

■ 英語外部検定試験導入

外部英語検定試験の導入について、入試委員会において検討を開始するとともに、学長はじめ学部長、入試委員長が出席する外部講師によるセミナーを実施した。その後の検討を経て、平成 30 年度一般入試より全学部において英語外部検定試験（4 技能のみ）の導入を決定した。

■ アドミッション・ポリシーの見直し

「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドラインを受けて、アドミッション・ポリシーの見直しを行った。

(分析結果とその根拠)

大学入試改革推進室のもと、佐賀大学版C B Tの開発および特色加点制度導入に向けた準備が進められ、高大接続改革に向けた計画が確実に実行されている。また、九州地区の国立大学との連携による文部科学省の大学入学者選抜委託事業へ代表大学として申請するだけでなく、「九州地区国立大学アドミッション研究会」の立ち上げを中心になって行うなど、大学間連携を主導的に進めながら、挑戦的な入試改革を行っている。

以上のことから、入学者選抜の制度、方法等の設計に関する支援は十分に遂行していると判断できる。

今後の課題として、「戦略性が高く意欲的な目標計画」の1つである高大接続改革を実現するために、佐賀大学版C B Tと特色加点制度については、学部や分野の特性に応じた導入を検討し、目標達成に向けた取り組みを進める必要がある。

観点①-2 入試広報や高大連携活動に関する業務が十分に遂行されているか。

(観点に係る状況)

- 各種説明会等の実施
 - 受験産業等が主催する進学説明会（「報告書」 p.191）
 - 高校や予備校等で実施する大学説明会（「報告書」 p.192）
 - 高校からの大学訪問において実施する説明会（「報告書」 p.193）
 - 九州地区国立大学合同説明会（「報告書」 p.194）
 - 高校教員対象の入試説明会（「報告書」 pp.147-153）
- オープンキャンパスの企画・実施（「報告書」 pp.54-87）
- 佐賀大学案内冊子の編集（「報告書」 p.195）
- きめ細やかな高校訪問（「報告書」 pp.137-146）
- 佐賀大学の新しいブランディング戦略（「報告書」 p.195）
- 入試直前説明会（「報告書」 p.195）
- ジョイントセミナーの管理・運営（「報告書」 pp.196-197）
- 新しい高大連携活動の開発・実施：（「報告書」 pp.154-174）

(分析結果とその根拠)

高校生、保護者、高校教員等を対象とした積極的な対面形式の説明会の実施だけでなく、オープンキャンパスの内容の充実化を図ることで、参加者数の増加という結果をもたらしている。また、きめ細やかな高校訪問は、平成28年度より着任した特任講師により行われているもので、年間のべ269校という訪問により丁寧な広報と進路指導現場の最新の情報収集も行っている。平成28年度入試においても十分な志願者を獲得した。一方、高大連携活動では、従来から実施してきたジョイントセミナーでは、のべ141名の教員を高校へ派遣し、高校生が高等教育へ触れる機会を十分に提供している。また、新たな高大連携活動の試みとして導入された継続・育成型の高大連携カリキュラムでは、教育学部が行う「教師へのとびら」に加え、理工学部と農学部が実施する「科学へのとびら」の実施、さらに医学部が実施する「医療人のとびら（仮称）」の平成29年度からの導入を決定するなど、課題となっていた分野の拡大が実施されている。

以上のことから、入試広報や高大連携活動に関する業務が十分に遂行されていると判断できる。

今後の課題として、「科学へのとびら」においては、各高校における課題研究を活性化し、学びの促進に繋げるための仕組みの検討が必要である。また、「医療人へのとびら（仮称）」の着実な実施に加え、「教師」「科学」「医療」以外の分野における継続・育成型の高大連携プログラムの開発や導入の検討が期待される。

観点①-4 入学者選抜に関する調査研究に関する業務が遂行されているか。

(観点に係る状況)

平成 28 年度は、以下の調査研究を行った（「報告書」を参照）。

- ① 理工学部の学部改組のための基礎資料作成（入試成績分析）
- ② H 2 8 年度一般入試における志願動向分析（入学試験委員会で報告）
- ③ H 2 8 年度入学者アンケート調査実施・分析
- ④ H 2 4 年度入学者の追跡調査
- ⑤ H 2 8 年度オープンキャンパス参加者アンケート調査実施・分析
- ⑥ H 2 8 年度ジョイントセミナーに関するアンケート調査実施・分析（受講者・高校教員向け）
- ⑦ 高大連携活動：平成 28 年度「教師へのとびら報告書」
- ⑧ 高大連携活動：平成 28 年度「科学へのとびら報告書」

(分析結果とその根拠)

志願者動向やアンケート調査の分析および入試データ分析などを通して、客観的なデータに基づく議論を行うための資料の蓄積ができています。以上のことから入学者選抜に関する調査研究に関する業務が十分に遂行できていると判断できる。

【観点②】 センターの組織運営が十分に行われているか。

(観点到に係わる状況)

運営委員会は、「(1) センターの管理運営の基本方針に関する事項」「(2) センターの教員の人事に関する事項」「(3) センターの予算及び決算に関する事項」「(4) 第14条に定める企画委員会が企画・立案し実施する事業等に関する事項」「(5) その他センターの管理運営に関する重要事項」に限定し、入学者選抜方法に関するもの、広報、高大接続、高大連携に関するものは各専門委員会で扱っている。平成28年度は、運営委員会が2回、入学者選抜方法等専門委員会が3回、広報・高大接続等専門委員会が2回実施された(「報告書」pp.199-200)。各委員会の構成メンバーは、「報告書」(p201)の通りである。これらの専門委員会の活動を通して、センターの業務が遂行されている。なお、センターの活動等に関するすべての事務は、学務部入試課が行っている。

目的：入学者選抜、入試広報、高大接続等に関する企画、立案等の業務を行うとともに、学部及び研究科で実施する入学者選抜を専門的立場から支援し、佐賀大学の教育研究の充実発展に寄与すること

業務内容：

1. 入学者選抜の制度、方法等の設計に関すること
2. 入試広報の企画、立案等に関すること
3. 高大接続、高大連携活動等の企画、立案等に関すること
4. その他入学者選抜に関すること

委員会名称	構成員
運営委員会	センター長、副センター長、専任教員、学部の入試委員
企画委員会	センター長、副センター長、専任教員、各学部の入試委員、入試課長
入学者選抜方法等専門委員会	センター長、副センター長、専任教員、各学部の入試委員、入試課長
広報・高大接続等専門委員会	センター長、副センター長、専任教員、各学部から選出された教員、入試課長

(分析結果とその根拠)

定期的かつ必要に応じて運営委員会および専門委員会を開催し、センターの業務を着実に実行していることから、組織運営が十分に行われていると判断できる。

平成 28 年度佐賀大学アドミッションセンター外部評価者用評価

【評価方法】以下の3段階で評価する
「期待される水準を上回る」
「期待される水準である」
「期待される水準を下回る」

組織運営の領域における評価および判断理由

【観点①-1】

(評価)「期待される水準を上回る」

(判断理由)

「佐賀大学版CBT」及び「特色加点制度導入」の導入に向けた開発や検討を確実に進めているとともに、英語外部検定試験の一般入試への導入やアドミッション・ポリシーの見直しなど、積極的な入試改革を推進する活動がみられる。さらに、九州地区の国立大学と日本IBMとの共同で文部科学省の委託事業への応募、「九州地区国立大学アドミッション研究会」設置の提案など、他大学や他機関とも連携した活動は、佐賀大学に限定されない高大接続改革の原動力になっている。

以上のことから、入学者選抜の制度、方法等の設計に関する支援が期待される以上に行われていると判断できる。

【観点①-2】

(評価)「期待される水準である」

(判断理由)

高校生、保護者、高校教員等を対象とした積極的な対面形式の説明会の実施だけでなく、オープンキャンパスの内容の充実化を図ることで、参加者数の増加という結果をもたらしている。また、平成28年度より着任した特任講師により、年間のべ269校というきめ細やかな高校訪問が行われており、丁寧な広報と進路指導現場の最新の情報収集がなされている。一方、高大連携活動では、従来から実施してきたジョイントセミナーの継続的实施に加え、新たな高大連携活動の試みとして導入された継続・育成型の高大連携カリキュラムにおいて、教育学部が行う「教師へのとびら」に加え、理工学部と農学部が実施する「科学へのとびら」の開発・実施、さらに医学部が実施する「医療人のとびら(仮称)」の平成29年度からの導入を決定するなど、同カリキュラムの拡充がみられる。

以上のことから、入試広報や高大連携活動に関する業務が期待される水準であると判断できる。

【観点①-3】

(評価)「期待される水準である」

(判断理由)

志願者動向やアンケート調査の分析および入試データ分析などを通して、客観的なデータに基づく議論を行うための資料の蓄積ができています。また、研究の領域でも十分な研究が実施されていることが確認できます。

以上のことから、入学者選抜に関する調査研究に関する業務は、期待される水準であると判断できます。

外部評価者：九州大学人間環境学研究院 教育学部門 准教授

氏名 木村拓也

